

龍谷大学『世界仏教文化研究論叢』第62集抜刷  
令和六年三月十二日発行

基礎研究部門 親鸞浄土教総合研究班 真宗学研究プロジェクト

玄智『考信録』の基礎的研究（その2）

塚本一真  
西村慶哉



基礎研究部門 親鸞浄土教総合研究班 真宗学研究プロジェクト

## 玄智『考信録』の基礎的研究(その2)

塚本一真

西村慶哉

### 〔論考篇〕

自筆本の書誌について

- ①所蔵：龍谷大学（京都府）
- ②筆者：成立年代：玄智自筆、寛政元年頃
- ③装丁：体裁等：袋綴装・写本七卷七冊、楮紙、無辺無界、漢文カナ交じり文、半葉一行ないし二行、一行二四字内外
- ④法量：(卷一) 25・5×18・1糶、(卷二) 25・5×18・1糶、(卷三) 25・6×18・1糶、(卷四) 25・5×18・1糶、(卷五) 25・5×18・1糶、(卷六) 25・6×18・1糶、(卷七) 25・6×18・1糶
- ④紙数：(卷一) 三八丁、(卷二) 三八丁、(卷三) 四二丁、(卷四) 五四丁、(卷五) 四二丁、(卷六) 六二丁、(卷七) 六九丁
- ⑤外題：(卷一) 左上「考信録」、左下「一」、(卷二) 左上「考信録」左下「二」、(卷三) 左上「考信録」左下「三」、(卷四) 左上「考信録」、左下「四」、(卷五) 左上「考信録」、左下「五」、(卷六) 左上「考信録」、左下「六」、(卷七) 左上「考信録」、左下「七」

玄智『考信録』の基礎的研究(その2)

⑥内題：(卷一)「考信録序」、(卷二)「考信録卷二」、(卷三)「考信録第三」、(卷四)「考信録卷四」、(卷五)「考信録第五」、(卷六)「考信録卷六」、(卷七)「考信録卷七」

⑦尾題：なし

⑧識語：(卷一序文)「安永三年甲午歲正月十一日京師慶証寺玄智景耀書于武州豊嶋郡峽田領江戶府築地別院省所」、(卷七奥書)「考信録七卷昔年艸之以來凡二十年于茲筆削屢積修治稍備於是塗抹狼藉殆不可讀今茲寛政元年己酉之夏興志校正創于五月十六日卒于閏六月二十六日／上慶証寺玄智景耀識」

⑨備考：濁点、朱筆による書き入れ、註記、抹消、料紙を切り貼りした改訂跡あり。また卷一表紙見返に「旧稿十一行再校十二行／間用旧稿故行数錯厠／写者知之」と書かれた貼紙あり。また冊子に仮綴の跡あり。

本書はその筆跡より玄智の自筆と目される。奥書には「寛政元年」の年紀が見えるが、その後も改訂が加えられていたようで、紙面には少なくとも寛政三年までの年紀を確認することができる(塚本2022)。そのため、本書の成立は寛政元年頃と推定した。

これら書誌情報の中で注目すべき点は、まず表紙見返の貼紙である。この記述によれば『考信録』には十一行の旧稿箇所と十二行の再校箇所のあることが知られる。また、「写者知之(写者これを知れ)」とあることから、本書が他者に書写させることを前提に製作されたことが想定される。さらに、前述のように行数が不統一である点や本書に付された夥しい改訂跡の残る体裁、仮綴が施されている点等に鑑みても本書は草稿本と清書本の間に位置する、いわゆる中書本のような性格を持つものとも推測される。

次に注目すべきは内題の巻数表記である。すなわち卷二、卷四、卷六、卷七の内題は「卷二」「卷四」…と「卷」の字が用いられているが、卷三、卷五は「第三」「第五」と「第」の字が用いられている。玄智による筆の誤りかもしれないが、同じく玄智の著作である『祖門旧事紀』と『真宗安心異諍紀事』に二種類の自筆本が現存していること、前述の通り本書には旧稿箇所と再校箇所が混在していること等に鑑みれば、『考信録』にも「卷二」「卷三」…と表記される系統と「第一」「第二」…と表記される系統の、少なくとも二種類の自筆本があったことが推測されるが、想像の域を出るものではなく、今後の研究の展開が俟たれる。

『考信録』巻一の目次の異同

先行研究でも指摘されるように、『考信録』は六巻本→七巻本という成立過程を経ているのだが、六巻本『考信録』と七巻本とくに自筆本『考信録』は、その構成や収録順序が大幅に異なっている。

では具体的に『考信録』の内容はどのように変遷しているのか、紙面の都合もあるので本稿では六巻本、自筆本の巻一の項目がそれぞれどのように対応するかを確認し、その変遷の過程を検討してみたい。

なお、「」で表記しているのは六巻本の目次にはなく、五巻本である真宗全書本にて表記される目次、「」は自筆本の目次にはなく七巻本書写本にて表記される目次である。それぞれ目次は異なるが、本文自体に相違はないので便宜的に用いた。

(一)〈六巻本〉巻一の項目と、〈七巻本〉への異同

六巻本巻一目次		対応する七巻本	
1	正信偈念仏和讃	巻一、正信偈和讃	34
2	五帖消息	巻二、御文法談	宗主
3	法談説法	巻一、御文法談	法王
4	改悔文	巻二、御文法談	宗主
5	漢音小経	巻二、漢音小経	巻五、寺官
6	甲念仏合殺	巻六、合殺	巻一、香房閉軸
7	呉漢両音	巻二、呉漢音読 巻六、【呉漢一音】	巻五、法橋
8	句読	巻二、呉漢音読 巻四、句読	巻五、本山本寺 末寺門徒
39	影堂大於本堂	巻一、本堂祖殿	巻五、開山
40	開山		
38	本寺本山末寺	巻五、本山本寺	
37	【法橋法眼法印】	巻五、法橋	
36	香部屋	巻一、香房閉軸	
35	寺官	巻五、寺官	

玄智『考信録』の基礎的研究(その2)

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14		13	12	11		10	9	
臥頭輪仏	梵楽	厨子	鑿	供花	花束	鶴亀燭台	膝突	〔打敷〕	輪灯	滅仏灯法	昼点仏灯	仏餉	齋非時		奉仏供式	六時礼讃	每朔宗主調声		慶讚小経	南无	
卷四、夜臥頭輪仏	卷四、【法事奏楽】	―	卷四、鑿・鈴・槌	卷四、供花	卷四、華束	卷四、鶴亀燭台	卷四、膝突	卷四、打敷	卷四、輪灯	卷四、滅灯	卷四、点灯	卷四、仏餉	卷四、時非時食	鉢台	卷四、飯供	卷二、礼讃	卷三、諸宗主前焚香		卷四、雜度式	卷二、漢音小経カ	卷四、点発
57	56	55	54	53	52	51		50	49	48		47	46	45	44	43	42	41			
〔鳥〕	〔扠子〕	〔桧扇中啓〕	〔数珠〕	〔修多羅〕	〔輪袈裟〕	紫服		法服純色	横帔	直綴		袈裟	手次道場	門徒	不遮屠者	公侯不屬真宗	宗名	龍谷			
卷四、勅許カ	卷四、扠子	卷四、桧扇中啓	卷四、数珠	卷四、修多羅 白襯身衣	卷四、輪袈裟	卷四、紫衣	紫衣	卷四、袍服純色 素絹袈附	裳無衣	卷四、直綴		卷四、小五条 西鎮禪衣	卷五、檀那	卷一、寺道場	卷三、不遮屠者	卷五、諸侯不屬門下	卷五、末寺門徒	卷一、寺道場			

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	自筆本巻一 目次	対応する六巻本
殿堂東向	本尊印契	配享諸像	払拭	修補故像	開眼慶賛	真宗仏像	勅崇浄土	諸民仏舎	像寺権輿	—	—
卷一、仏殿不北向	卷五、蓮台青白	卷四、〔弥陀螺髮行〕	卷四、等身像	卷三、太子祖像位次	卷六、本山近來法式	卷二、修仏像	卷一、慶賛小経	卷一、古皇奉法	卷二、古皇奉法	卷二、古皇奉法	—
19	18	17	16		15	14	13	12	11	自筆本巻一 目次	対応する七巻本
※分類不明(標目未記入)	黄卷赤軸	経蔵	寺道場		三年塞	牆□長隅	築立牆	香房閉軸	本堂祖殿	—	—
卷五、大御仲居大黒天	卷四、黄卷赤軸	卷四、輪蔵経数	卷一、龍谷	卷二、山号寺号	卷一、手次道場	卷一、避鬼門	卷一、避鬼門	卷一、門内牆	卷一、香部屋	卷一、影堂大於本堂	—

(二) 自筆本巻一の目次と、対応する(六巻本)

33	32	31		30	29	28
仏殿不北向	門内牆	避鬼門		早引	合掌礼拝	禁壳仏像
卷一、殿堂東向	卷一、築立牆	三年塞		—	卷四、合掌	—
63	62	61	60	59	58	
〔漢籍雅称〕	仏具名目	角盥	〔柳筥〕	巾箱	曲録	
—	卷四、香炉カ	—	—	—	—	—

以上のように、六巻本と七巻本ではその構成が大幅に異なっていることが一目瞭然である。さらに、それぞれの項目を見てみると、無作為に項目が並べられた六巻本に比して、七巻本は像寺に関する項目である程度統一されていることが窺われる。また、六巻本から七巻本への項目の移動をみても、読経に関わるものは二巻、法具や法衣に関わるものは四巻など、七巻本では規則的に配置し直されていることがわかる。これらは分類化による検索性の向上を目指したものと想像される。

また、これらの対応表から、七巻本では不採用となった六巻本の項目、七巻本によって新たに採用された項目のあることが確認できる。これらの項目の採不採の要因や基準についても、今後検討すべき課題の一つであろう。

（西村慶哉）

### 玄智『考信録』研究の可能性

本プロジェクトにおける昨年度の研究報告<sup>①</sup>段階では、龍谷大学蔵玄智自筆七巻本（以下、「自筆本」と呼称）について、近年の先行研究をまとめた上で、最後に研究の課題と展望として以下のように述べている。

「自筆本」は玄智晩年の意向が反映された一本であるのみならず、その修正箇所を精査することで、玄智の思索の経過を辿ることができる貴重な史料である。しかし、その史料を活かすためには、単純に翻刻を施すだけでは不十分であり、一つ一つの修正の跡を綿密に分析し、記録する、そういった質の高い翻刻作業が求められる。また困難なことではあるが、大谷大学図書館・佛教大学図書館をはじめ、各地に所蔵される『考信録』の諸本、そして玄智の数多ある著作群をも広く見渡した上で、「自筆本」の修正意図を読み解く必要がある。

この時点では、「考信録」の諸本「および」玄智の数多ある著作群」と「自筆本」との関係については、未着手であった。しかし、その後の研究により「自筆本」に至る『考信録』成立の過程が明らかになってきた。それは、「考信録」の諸本」と「玄智の数多ある著作群」とによる考察の成果である。本章では、それらを踏まえ、今後の研究の可能性について述べておきたい。

まず、確認しておきたいのは、『考信録』とは、著者の玄智により増補改訂が繰り返された書であることが明らかとなっている点である。改訂は、段階的に大きく三期に分けられる。第一期は、執筆時の段階である。それは、序にある「安永三年」以前の年紀のみしか確認できないことから、明らかである。基本構成は二巻で、第二期の第一巻、第二巻と同じであるが、巻末の本文を比較すると分量は著しく少ない。次の第二期



には、第一期から四巻が増補されている。本文には、執筆時点である「安永三年」以降の年紀が多数みられる。また、全体において整備され、現存する書写本の多くがこの時期の構成であることから考えれば、一応の完成とみることも可能であろう。そして、第三期は再構成され、最晩年に至るまで筆を入れ続けた最終段階である。

これらの点が明らかになり、『考信録』とは近世本願寺を代表する碩学であった玄智が生涯を尽くして積み重ねた知の集成といえるようになった。また、増補改訂が繰り返されたということは、これまで『考信録』と考えられていた内容（第二期）は、中途の状態に過ぎないことを意味する。そのため、従来の『考信録』を用いてきた研究には、あらためていかなければならない可能性が生じていることは、これまで述べてきたところである。このような事実は、現代に置き換えて言えば、事典が初版から第二版、第三版と情報量が増え内容を修正するのと同じように、更新され続けたと理解すればわかりやすい。そうなると、以前のものは依用せずに『考信録』の最新版である「自筆本」だけが重要だと考えるのが当然の発想になるだろう。しかし、話はそう単純でもない。その理由は、「自筆本」と『考信録』の諸本」および「玄智の数多ある著作群」との関係にある。

前に述べたように、『考信録』には大きく分けて三つの段階があり、巻数と合わせていえば①第一期が二巻本、②第二期が六巻本、③第三期が七巻本である。各段階の具体的様相は、現存する「『考信録』の諸本」によって知ることができる。①から②への更新で行われたのは基本的には増補作業であり、①は②の第一巻・第二巻の原初形態とみられる。そのため、①を振り返る必要性はほとんどない。しかし、②になると基本構成が同じでありながら、内容が一致しない諸本が現存している。それらは少しずつ改訂された跡を伝えたもので、それぞれにみるべき所がある。そして、③では「自筆本」の内容や体裁から、玄智自身が大幅な改訂を行った上で基本構成の再編をしていることがわかる。それまで単純な増補と内容の微調整にあつた玄智の意図は一気に複雑化するのである。

それではまず、その意図がわかりやすい例を一つ挙げたい。玄智は、書肆との関わりが深く、出版メディアに影響力をもっていた。また、動行に依用する經典の文字、読み方についても広範な知識をもっていたことは、すでに先行研究において指摘されている。そのため学僧でありながら、安永六（一七七七）年十二月に『往生礼讃』の校刻本を自ら刊行している。それは、『浄土真宗教典志』（三巻本）に、

大谷往生礼讃偈一冊／安永六年丁酉十二月。玄智景耀校刻。作法次第。全準本偈正規以正蓮門課誦差誤。四声・清濁・句読・節譜・音註・

校異・考証・附言・最加其詳

〔真宗全書〕七四、二二七)

と玄智自身が述べていることからわかる。しかし、『考信録』では、これに関する記述の有無や位置づけが制作の時期によって相異なる。『考信録』の諸本のうち、まず①に該当する大谷大学図書館所蔵書写本(二巻)には記されていない。これは、安永三年を下限とする第一期に『往生礼讃』の校刻本はまだ刊行されていないため当然である。それでは、②についてみていきたい。天明二(一七八二)年頃の書写である佛教大学図書館蔵書写本(五巻)には、第一巻の「六時礼讃」解説本文に、

安永六年丁酉十二月往生礼讃偈新刻成具サニ旧式ノ非ヲ訂セリ

と記される頭註がある。一方で、同じく②に該当するうち、天明五(一七八五)年頃の書写とみられる龍谷大学図書館蔵書写本(六巻)には、この記述はないのである。同じ②の時期のうち、佛教大学図書館蔵書写本(五巻)では頭註であり、おおよそ三年後の状態を書写した龍谷大学図書館蔵書写本(六巻)にはないのである。そのため、佛教大学図書館蔵書写本(五巻)では、たまたま備忘的に記された内容で、後に削除されたと考えることができる。しかし、そうではない。この『往生礼讃』に関する記述は、玄智が『考信録』として収録すべき内容と考えていたことは間違いないと断言できるのである。なぜならそれは、②から情報が大幅に更新され、最晩年まで筆を入れ続けた③の「自筆本」では、頭註ではなく本文となっているからである。このように各段階の「考信録」の諸本に残された足跡を「自筆本」の隣に並べることにより、玄智の意図がくつきりと浮き上がってくる。ここに本研究プロジェクトが行っている「自筆本」翻刻の意義もある。

次に別の例を挙げたい。各段階に残された足跡を辿ることで玄智の意図が明確になる一方で、失われた足跡、すなわち『考信録』の諸本に記されていた内容が「自筆本」では削除されていた場合は、判断に注意を要する。『考信録』の諸本のうち、②に該当する六巻構成の書写本にのみみられる内容がある。龍谷大学図書館蔵書写本(六巻)を例に挙げると、第六巻の冒頭には

目録

本山近來法式 諸州別院由縁 祖像論 御剃刀頂受 諸宗主黒衣像 国忌式 官階次序 諸寺僧踰 本山祖像説  
興正寺洪鐘慶賛式 能化 襟巻 院家坊宦権興 興正寺脇門跡勅書 同背本受護連署 両忌日

との項目が列挙されている。この内容からも推定できるように、第六巻には本願寺の雑事が記されている。これが③の「自筆本」には引き継が

れていない。ここまでで考えれば、玄智は『考信録』を再編するにあたり不要だと考えて削除したのだという結論になるだろう。しかし、そこには吟味しなければならない課題が生じている。それが「自筆本」と「玄智の数多ある著作群」との関係である。この龍谷大学図書館蔵書写本（六巻）第六巻の本文の多くは、③の「自筆本」には見られないが、実は、玄智の別の著作である『祖門旧事紀』にほぼ同文が収録されている。つまり、玄智の意図としては、「不要であるから削除した」という他に「別の著作として独立させたので、内容を整理したにすぎない」という可能性が生じるのである。玄智はたくさんの著作をのこしている。『真宗学匠著述目録』（井上哲雄、百華苑、一九三〇年）の玄智の項には、五十を越える著作が挙げられており、その一部を紹介してみると、本派本願寺の歴史を中心とした近世真宗の歴史書『大谷本願寺通紀』、『漢語灯録』の「類聚浄土五祖伝」にならい七高僧および聖徳太子の伝記を編集した『浄土真宗七高祖伝』、四十巻におよぶ『教行信証』の註釈書である『教行信証光融録』、『浄土三部経』の唱読音について時代とともに揺れ動いてきた漢字の読み方を考証した『浄土三経字音考』である。これら四つの著作内容が、まったく異なる性格であることからわかるように、玄智の学問上の守備範囲は極めて広い。また、『考信録』も「真宗の百科事典」と称されるように、その内容は多岐にわたる。つまり、『考信録』が晩年に至るまで筆をいれ続けられたことを考えると、「玄智の数多ある著作群」と『考信録』とは互いに関わり合って成立していった可能性があるということである。この点が、最終段階と考えられる③の「自筆本」に至り、「玄智の意図は一気に複雑化する」と前述した理由である。

以上、前回の報告後の研究の進展とともに生じてきた課題について具体的な例を挙げ述べてきた。「自筆本」の修正意図を読み解くことは決して容易ではない。しかし、それだけ研究の余地があるということでもある。「玄智の数多ある著作群」の多くは、現代的な視点から見た時にも、教学・歴史・唱読などの分野で専門性が高く、いまだ先行研究として無視できる位置にはない。それは、多分野において活躍した玄智の『考信録』を研究することが、真宗学だけでなく仏教学や歴史学あるいは出版メディアや法式などに影響を与える可能性を多分に含んでいるということでもある。さらに言えば、幸いなことに『考信録』の諸本や「玄智の数多ある著作群」の原本や書写本には、龍谷大学図書館に所蔵されているものが多数あり、それらの中には、「自筆本」と同筆と見られるものもある。すなわち、恵まれた研究環境にあるといえるのである。

本プロジェクトには、龍谷大学図書館に所蔵されている「玄智の数多ある著作群」を「自筆本」をはじめとした『考信録』の諸本」と相互

に関連性をみていくことで、『考信録』に収録された「百科事典」的な個々の内容が、近世という時代を背景とした一分野にとどまらない研究として展開していくことを期待していただきたい。(塚本一真)

註

(1) 那須英勝、内田准心、内手弘太「玄智『考信録』の基礎的研究」(『世界仏教文化研究論叢 六〇、二〇二二年』)

(2) 拙稿「『考信録』の増補改訂について」(『真宗研究第六六号、二〇二二年』)

〔翻刻篇〕

翻刻(龍谷大学図書館蔵『考信録』七卷本(請求番号029/604)巻一・一九九丁左八行(末尾)。なお、凡例は前回(玄智『考信録』の基礎的研究)『龍谷大学世界仏教文化研究論叢60』、二〇二二年)を参照されたい。

阿弥陀秘訣下初紙ニヨルニ弥陀ニ螺髮形アリ胎藏界曼陀羅所列赤金色入定相目稱開下視法藏出家成覚之宝冠形アリ金剛界金色俗形因位在俗当南都興福寺南円堂不空繡索相也印契ニ六種アリ一、妙觀察智ノ定印即羯磨会、仏ナリニ根本印藏同体即三昧会ノ仏ナリニ蓮華三昧印即蓮花部ノ仏ナリ四得自性段印即理趣会ノ仏ナリ五如来拳印六九品印即九品大曼荼羅ノ印ナリ覚鑊ハ三身印ヲ最極秘印トス当麻曼荼羅中台弥陀三身印ナリ左手ハ法報二身ノ印右手ハ心身ノ印ナリ心身ノ弥陀ハ分此定印為二米迎ノ印是ナリ〇礮石集四末三十二云地藏菩薩ノ声聞形ハ阿弥陀仏ノ因位宝藏比丘ノ貌ナリトイヘリ諸神本懷集ニモ地藏法藏一体ノ説アリ

三身印者左手ハ法身報身印也合三三大指与三三無名指中指一一右手ハ心身印也合三三頭指与二二大指一一掌掌為レ外外云云真身觀ノ像変ナリトミユ陳善院説云今宗ノ本尊ノ印ハ壽命ノ印ナリ坐立共ニ風指ト空指トヲ合スル大指頭指中指無名指小指如次空風火水地ト配ス命ハ必ズ息風ト息風ノ出入スル空処トノ二種ニ由テ相統ス故空風ノ兩指ヲ合シテ無量寿ヲ表ス兩手ノ上下ハ左ハ慈悲ナリ故ニ垂下ス右ハ智慧ナリ故ニ挙上ス觀音ハ左侍シ勢至ハ右侍スルモマタ悲智左右ノ理ナリ淨土真宗本尊義九右云五分三別印相、一者拳ニ右手、一垂ニ左手、一兩手各向マニ掌マ於外ニ風指空指相捻シテ余三指ハ皆伸アリ此印相於三經軌中一不

積<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>其名義<sub>ヲ</sub>、今考<sub>ル</sub>此分<sub>ニ</sub>無所不至<sub>ノ</sub>印<sub>ヲ</sub>、成<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>也、無所不至<sub>ノ</sub>印者<sub>ニ</sub>手合掌<sub>シテ</sub>、屈<sub>シテ</sub>、三<sub>ニ</sub>風指<sub>ヲ</sub>、一<sub>ニ</sub>押<sub>ス</sub>、二<sub>ニ</sub>空指<sub>ヲ</sub>、頭<sub>ヲ</sub>、此法身遍法界無障礙<sub>ノ</sub>、印也、分<sub>ニ</sub>此印<sub>ヲ</sub>、成<sub>ニ</sub>今印<sub>一</sub>、即法性法身<sub>ヲ</sub>、生<sub>スル</sub>、二<sub>ニ</sub>方便法身<sub>ヲ</sub>、之義也、拳<sub>レ</sub>手<sub>ヲ</sub>、頭<sub>ニ</sub>光明徧照<sub>ノ</sub>、相<sub>ヲ</sub>、垂<sub>レ</sub>手<sub>ヲ</sub>、示<sub>ス</sub>、二<sub>ニ</sub>攝取衆生<sub>ノ</sub>、相<sub>ヲ</sub>、也、風指<sub>ニ</sub>空指<sub>ヲ</sub>相捻<sub>スル</sub>、風行<sub>ニ</sub>於空中<sub>ヲ</sub>、一<sub>ニ</sub>即無障無礙<sub>ノ</sub>、相也、禮贊<sub>ニ</sub>云<sub>レ</sub>宝手印恒分<sub>ト</sub>、此贊<sub>ニ</sub>如來<sub>ノ</sub>、大悲方便常恒示<sub>ス</sub>、二<sub>ニ</sub>徧照攝取相印<sub>一</sub>也、一<sub>ニ</sub>說<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>今印<sub>一</sub>、為<sub>ニ</sub>心身來迎<sub>ノ</sub>、印<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>然<sub>ニ</sub>既判<sub>ニ</sub>心身<sub>一</sub>、為<sub>ニ</sub>報身<sub>一</sub>、若<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>印相<sub>一</sub>、為<sub>ニ</sub>心身<sub>一</sub>、印<sub>一</sub>、則成<sub>ニ</sub>身手不相應<sub>ノ</sub>、失<sub>レ</sub>、又以<sub>レ</sub>心身來迎<sub>ノ</sub>、為<sub>ニ</sub>本尊<sub>一</sub>、則違<sub>ニ</sub>不來迎<sub>ノ</sub>、宗旨<sub>一</sub>、既無<sub>レ</sub>經軌、定判<sub>ニ</sub>今依<sub>ニ</sub>宗意<sub>一</sub>考<sub>ル</sub>之、但是方便法身徧照攝取<sub>ノ</sub>、相也。

真宗<sub>ニ</sub>心身彰實義<sub>ノ</sub>、十<sub>ニ</sub>問本尊<sub>一</sub>、印相<sub>ニ</sub>拳<sub>ニ</sub>右手<sub>一</sub>、垂<sub>ニ</sub>左手<sub>一</sub>、共<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>空指<sub>一</sub>、押<sub>ニ</sub>風指<sub>一</sub>、頭<sub>ヲ</sub>、同<sub>ク</sub>、外<sub>ニ</sub>、掌<sub>ヲ</sub>、此印契出<sub>ニ</sub>何<sub>ノ</sub>、經儀軌中<sub>ニ</sub>、耶答<sub>ニ</sub>印契<sub>一</sub>、在<sub>ニ</sub>密乘<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>慣<sub>ナラハ</sub>、未<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>經軌<sub>一</sub>、說<sub>ニ</sub>或云上品下生<sub>一</sub>、心<sub>ヲ</sub>、印也、或云心身來迎<sub>ノ</sub>、印也、或云分<sub>ニ</sub>法身無所不至<sub>ノ</sub>、印<sub>一</sub>、生<sub>ニ</sub>今<sub>一</sub>、印相<sub>ヲ</sub>、拳<sub>レ</sub>手<sub>ヲ</sub>、頭<sub>ニ</sub>光明徧照<sub>一</sub>、垂<sub>レ</sub>手<sub>ヲ</sub>、示<sub>ニ</sub>攝取衆生<sub>ノ</sub>、也、風空相捻<sub>スル</sub>、者<sub>ニ</sub>風行<sub>ニ</sub>於空中<sub>一</sub>、即無障無礙<sub>ノ</sub>、相也、今案<sub>ニ</sub>言<sub>レ</sub>分<sub>ニ</sub>無所不至<sub>ノ</sub>、印<sub>一</sub>者<sub>ヲ</sub>、為<sub>レ</sub>、言<sub>ニ</sub>法性法身<sub>一</sub>、生<sub>スル</sub>、二<sub>ニ</sub>方便法身<sub>一</sub>之附會<sub>ノ</sub>、說也、分<sub>ニ</sub>報身<sub>一</sub>、定印<sub>ヲ</sub>、一<sub>ニ</sub>則成<sub>ニ</sub>心身<sub>一</sub>、印<sub>一</sub>、故<sub>ニ</sub>巧言<sub>一</sub>、分<sub>ニ</sub>法身<sub>一</sub>、印<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>、二<sub>ニ</sub>報身<sub>一</sub>、印<sub>一</sub>、義<sub>ヲ</sub>、也、併<sub>ニ</sub>無所不至<sub>ノ</sub>、印<sub>一</sub>、定印<sub>ヲ</sub>、隨<sub>ニ</sub>何<sub>ノ</sub>、分<sub>ニ</sub>兩手<sub>一</sub>、一<sub>ニ</sub>時<sub>一</sub>、同<sub>一</sub>、事也、當<sub>ニ</sub>言<sub>ニ</sub>心身<sub>一</sub>、印<sub>一</sub>、言<sub>ニ</sub>雖<sub>レ</sub>異<sub>一</sub>、印相<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>異<sub>一</sub>、但<sub>レ</sub>訖里句妙觀察智<sub>ノ</sub>、印<sub>ヲ</sub>、仰<sub>ニ</sub>左右<sub>一</sub>、手<sub>ヲ</sub>、相縛<sub>シテ</sub>、豎<sub>ニ</sub>合<sub>ニ</sub>二風指<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>二空指<sub>一</sub>、一<sub>ニ</sub>押<sub>ス</sub>、二<sub>ニ</sub>風指<sub>一</sub>、頭<sub>ヲ</sub>、安<sub>ク</sub>、二<sub>ニ</sub>臍前<sub>一</sub>、也、分<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>、拳<sub>ニ</sub>右手<sub>一</sub>、垂<sub>ニ</sub>左手<sub>一</sub>、

玄智『考信錄』の基礎的研究(その2)

外<sub>ニ</sub>、則成<sub>ニ</sub>、今<sub>一</sub>、本尊<sub>ノ</sub>、印<sub>一</sub>、也、然<sub>ニ</sub>、左右共<sub>ニ</sub>、以<sub>レ</sub>空指<sub>一</sub>、押<sub>ニ</sub>二風指<sub>一</sub>、頭<sub>一</sub>、一<sub>ニ</sub>則共<sub>ニ</sub>、彈指也<sub>一</sub>、依<sub>ニ</sub>普賢曼陀羅經<sub>一</sub>、說<sub>ニ</sub>、左手<sub>一</sub>、彈指得<sub>ニ</sub>一切善事速疾成就<sub>一</sub>、若<sub>レ</sub>右手<sub>一</sub>、彈指得<sub>ニ</sub>速疾集會<sub>一</sub>、此名<sub>ニ</sub>彈指請召<sub>一</sub>、印<sub>一</sub>、准<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>、彼經<sub>ニ</sub>與<sub>レ</sub>印雖<sub>レ</sub>異<sub>一</sub>、彈指<sub>ニ</sub>相類<sub>一</sub>、左<sub>ニ</sub>彈指<sub>一</sub>、大經<sub>ニ</sub>、一念<sub>ニ</sub>大利<sub>一</sub>、右<sub>ニ</sub>彈指<sub>一</sub>、觀經<sub>ニ</sub>、如<sub>レ</sub>彈指頃<sub>一</sub>、往生<sub>ニ</sub>彼國<sub>一</sub>、也、安樂能人在<sub>レ</sub>彼<sub>ニ</sub>、招喚<sub>ニ</sub>、豈無<sub>ニ</sub>彈指請召<sub>一</sub>、印<sub>一</sub>、乎、併<sub>ニ</sub>此義契<sub>ニ</sub>、經軌<sub>一</sub>、說<sub>ニ</sub>、否<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>、知<sub>レ</sub>值<sub>ニ</sub>具眼<sub>一</sub>、人<sub>一</sub>、得<sub>ニ</sub>取舍<sub>一</sub>、一<sub>ニ</sub>則幸<sub>一</sub>、矣、若<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>、言<sub>ニ</sub>、下<sub>ニ</sub>分<sub>ニ</sub>報身<sub>一</sub>、印<sub>一</sub>、則心身來迎<sub>ノ</sub>、印<sub>一</sub>、難<sub>レ</sub>、為<sub>レ</sub>、今家<sub>ノ</sub>、本尊<sub>上</sub>、則非也、報心來不來<sub>ハ</sub>、在<sub>ニ</sub>所見<sub>一</sub>、機<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>拘<sub>ニ</sub>身相<sub>一</sub>、要門<sub>ニ</sub>弘願<sub>一</sub>、所見<sub>ニ</sub>異<sub>一</sub>、故<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>下<sub>ニ</sub>要門<sub>一</sub>、機見<sub>ニ</sub>難<sub>ニ</sub>中<sub>一</sub>、弘願<sub>一</sub>、心<sub>ヲ</sub>、云<sub>云</sub>。

摸象記<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>中<sub>一</sub>、四十<sub>ニ</sub>云<sub>一</sub>、他流<sub>一</sub>、漢<sub>ニ</sub>曰<sub>一</sub>、佛像合<sub>ニ</sub>、三<sub>ニ</sub>大指<sub>一</sub>、與<sub>ニ</sub>二中指<sub>一</sub>、無名指<sub>一</sub>、而坐者法報<sub>ニ</sub>二身<sub>一</sub>、印合<sub>ニ</sub>、三<sub>ニ</sub>大指<sub>一</sub>、與<sub>ニ</sub>二頭指<sub>一</sub>、而立者心身<sub>一</sub>、印然如<sub>ニ</sub>親禪徒<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>安<sub>ニ</sub>本尊<sub>一</sub>、者是<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>下品<sub>一</sub>、來迎<sub>ニ</sub>心身<sub>一</sub>、彼徒願<sub>レ</sub>生<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>下品<sub>一</sub>、土<sub>ニ</sub>乎<sub>一</sub>、善導<sub>ハ</sub>、不<sub>レ</sub>爾<sub>ニ</sub>、爾<sub>ニ</sub>然<sub>一</sub>、則須<sub>レ</sub>安<sub>ニ</sub>上品<sub>一</sub>、坐像<sub>ヲ</sub>、云<sub>レ</sub>淨教何<sub>ノ</sub>、文<sub>ニ</sub>、論<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>身<sub>一</sub>、印相<sub>一</sub>、一<sub>ニ</sub>縱準<sub>ニ</sub>聖道<sub>一</sub>、教式<sub>一</sub>、下<sub>ニ</sub>下品<sub>一</sub>、像<sub>ハ</sub>、合<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>大指<sub>一</sub>、與<sub>ニ</sub>二無名指<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>說<sub>ニ</sub>、下<sub>ニ</sub>與<sub>ニ</sub>二頭指<sub>一</sub>、合<sub>ニ</sub>者<sub>一</sub>、寧<sub>レ</sub>擬<sub>ニ</sub>、二我宗<sub>一</sub>、本尊<sub>ヲ</sub>、一<sub>ニ</sub>耶弥陀<sub>一</sub>、身<sub>ヲ</sub>、土<sub>ヲ</sub>、報化<sub>ニ</sub>一體<sub>一</sub>、從<sub>ニ</sub>他力<sub>一</sub>、見<sub>レ</sub>、即<sub>レ</sub>化<sub>ニ</sub>而報<sub>一</sub>、例<sub>ニ</sub>如下<sub>一</sub>、竜女讚<sub>ニ</sub>心身<sub>一</sub>、言<sub>ニ</sub>、微妙淨法身<sub>一</sub>、等<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>、即<sub>レ</sub>應<sub>ニ</sub>而法<sub>一</sub>、如下<sub>ニ</sub>、全竜尊王<sub>一</sub>、歎<sub>ニ</sub>心身<sub>一</sub>、卅<sub>ニ</sub>二相<sub>一</sub>、天<sub>ニ</sub>台<sub>一</sub>、積<sub>ニ</sub>言<sub>一</sub>、歎<sub>ニ</sub>尊特<sub>一</sub>、上<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>、即<sub>レ</sub>應<sub>ニ</sub>而報<sub>一</sub>、弥陀報<sub>ニ</sub>心<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>撰<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>下品<sub>一</sub>、機<sub>一</sub>、一<sub>ニ</sub>用<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>、超世<sub>ノ</sub>、願功<sub>一</sub>、一<sub>ニ</sub>說<sub>ニ</sub>華籠經<sub>一</sub>、劫<sub>一</sub>、者<sub>ニ</sub>抑止<sub>ニ</sub>門<sub>一</sub>、也、但<sub>レ</sub>聞<sub>ニ</sub>心<sub>一</sub>、名<sub>ニ</sub>二菩薩<sub>一</sub>、名<sub>一</sub>、除<sub>ニ</sub>無量劫<sub>一</sub>、罪<sub>一</sub>、況<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>下品<sub>一</sub>、乘<sub>ニ</sub>三十八願<sub>一</sub>、一<sub>ニ</sub>至心<sub>一</sub>、十念<sub>一</sub>、十念<sub>ハ</sub>、即<sub>ニ</sub>直入<sub>ニ</sub>真報土<sub>一</sub>、証<sub>ニ</sub>法性身<sub>一</sub>、他力<sub>ノ</sub>、信者<sub>ニ</sub>唯敬<sub>一</sub>、悲願成就<sub>ノ</sub>、尊相<sub>一</sub>、乃至<sub>ニ</sub>十念<sub>一</sub>、

不レ用レ想<sup>スルコトヲ</sup>見<sup>三</sup>身印相<sup>一</sup>例如下<sup>ニ</sup>優婆塞多日<sup>中</sup>我礼<sup>ニ</sup>仏<sup>ノ</sup>形像<sup>一</sup>

不レ礼<sup>中</sup>汝魔形<sup>上</sup>九<sup>「十八」</sup>謂<sup>下</sup>応身<sup>為</sup>ニ本尊<sup>一</sup>願<sup>ズルカト</sup>生<sup>中</sup>下品<sup>一</sup>

土<sup>上</sup>者可<sup>レ</sup>笑<sup>ツ</sup>之甚<sup>也</sup>略抄

案ズルニ本尊義ニ云ガ如ク今家所奉ノ弥陀尊立像ノ印相モト経説ノ本

抛ナシ故ニ種々義推ノ説ヲナスノミ然ルニ当麻変相ハ聖者感応ナレバ

非<sup>ニ</sup>今所<sup>レ</sup>論<sup>当麻変相雜觀ノ下ニ</sup>立像ヲ出セル

不可具見ナレバ輒ク摸写スベカラズ五通菩薩所写ノ真像ハ<sup>十三</sup>珠林

善光寺ノ像既ニ真仏ヲ感見シテ鑄写セルモノナレバ実ニ範模トスベシ

真仏鑄写ノ本縁ソノ典拠未<sup>レ</sup>詳<sup>ナリ</sup>連環解<sup>六</sup>三<sup>十</sup>云善光寺象世伝月蓋長

者以閻浮檀金鑄写者是世縁由委如<sup>ニ</sup>濟北集七<sup>一</sup>文<sup>「</sup>濟北集七<sup>七</sup>善光寺

飛柱記一首アリ正和三年飛柱ノ異アリシ事ヲ記セリソノ尾ニ善光寺主

事律師円西ノ言ヲ載<sup>テ</sup>云西云吾仏欽明十三年貢<sup>レ</sup>自<sup>ニ</sup>百濟推古十三年

戻<sup>ニ</sup>止<sup>本州</sup>コノ文ノミ別ニ仏像ノ縁由ヲ悉ク叙スルコトナシ<sup>又集</sup>六<sup>「</sup>十

五<sup>」</sup>送僧之善光寺ト云詩題<sup>近如照蒙記上</sup>五<sup>「</sup>十七<sup>」</sup>引<sup>天下伝レ</sup>之礼讚晨朝偈日光

舒救<sup>ニ</sup>毘舍<sup>一空立引</sup>三章提<sup>ト</sup>月蓋章提ノ所感ヲ一對トス娑婆応現ノ相

齊同ナルベケレバ毘舍ノ像ヲ用テ空中ノ像ヲ摸スルニ何ノ不可アラン

況ヤ祖師ニ於テ両箇ノ因縁アリ<sup>定禪夢告及</sup>善光寺ノ摸像正ク真宗ノ本尊

ニ符合スタ、専修ノ風ヲ守テ両脇士ヲ闕ヲ異トスルノミ梵土伝来ノ相

ヲ摸セリト定ムル上ニテ密部印契ノ説ハ用否随<sup>レ</sup>宜ベシモシ密家ニ依

ザレバ仏像由致不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>知ト云ハ、密藏未<sup>レ</sup>伝已前ハ何説ニ原テ刻画ス

ベキヤ

善光寺像印契ノ相本像ハ我未<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>之模刻ノ像ハ真宗ノ本尊ト全ク同

ジキアリ或少差ヲ存スルアリ<sup>京河原町ニ奈高田別院安校町院敷刺一光三尊像此</sup>

令<sup>ニ</sup>衆<sup>ヲ</sup>拜<sup>レ</sup>之右手<sup>上</sup>五指共堅左手<sup>下</sup>五指<sup>ト</sup>無名指<sup>ト</sup>合<sup>シ</sup>將指<sup>ト</sup>指<sup>ト</sup>共<sup>伸</sup>レ之袈裟<sup>ニ</sup>

有<sup>ニ</sup>如<sup>レ</sup>紋者<sup>信州善光寺所布模刻画像亦同レ之但無<sup>ニ</sup>衣紋相<sup>ニ</sup>叢林云弥陀像有<sup>ニ</sup>九品別印<sup>ニ</sup></sup>

身印<sup>ヲ</sup>接像<sup>四十八願印形等</sup>当家本尊<sup>下</sup>品<sup>上</sup>生印也悲願酬報<sup>ニ</sup>依元向<sup>ニ</sup>惡惡機<sup>本</sup>意<sup>也</sup>

頭<sup>ニ</sup>於<sup>下</sup>品<sup>一</sup>称名往生及聞名往生<sup>下</sup>上品始説故安<sup>ニ</sup>此品像<sup>一</sup>者歎善光寺如来此印相也仏

像因<sup>衆</sup>之印<sup>云</sup>上<sup>品</sup>下<sup>生</sup>云云抄出

漢語<sup>七</sup>「初」逆修説法云某者雖<sup>ニ</sup>刻<sup>ニ</sup>三尺阿彌陀佛引接形像<sup>ニ</sup>而作<sup>ニ</sup>七七<sup>日</sup>預修佛事<sup>應</sup>

彼固請<sup>レ</sup>慶讚説法所造尊容模<sup>ニ</sup>做<sup>ニ</sup>祇園精舍聖像<sup>一</sup>以擬<sup>ニ</sup>最期終焉先導<sup>一</sup>者也凡造<sup>ニ</sup>立佛像<sup>有</sup>

種々相<sup>若</sup>刻若<sup>ニ</sup>画<sup>ニ</sup>雖<sup>皆</sup>爲<sup>ニ</sup>往生業<sup>然</sup>而來<sup>ニ</sup>迎引<sup>接</sup>之相<sup>尚</sup>獲<sup>ニ</sup>其便宜<sup>也</sup>乃至若造<sup>ニ</sup>佛像<sup>當</sup>

造<sup>ニ</sup>來迎形像<sup>也</sup>云云祇園ノ聖像トハ行事鈔<sup>下</sup>四<sup>「</sup>三<sup>」</sup>所引本伝ノ無常院立仏像<sup>拳</sup>右手<sup>一</sup>

モノヲ指<sup>ス</sup>ナリ來迎心印<sup>真身</sup>ナリト見ルノ意ナリ

本山本堂ノ中尊ノ蓮台ハ青蓮ニシテ華葉ニ金色ノ宝珠アリ大谷ノ蓮台

ハ白蓮ニシテ華葉ノ端少シ赤シ山科モ青蓮ナリ門下へ賜ハル繪本尊ミ

ナ青蓮ナリ但シ末寺へ賜ハル木仏ハ金蓮ナリ各々所由アルベシ華座觀

ノ説相ヲ考ルニ蓮華葉ゴトニ百宝色ヲ作ストアレバ純一色ニハ非ズ

葉間<sup>ニ</sup>摩尼珠<sup>アリト</sup>説ケリ散善義ノ巻尾ノ靈感ノ記ニハ見<sup>下</sup>阿弥陀仏身金色

華葉ノ金珠コレヲ表スルカ<sup>在</sup>ニ七宝樹下金蓮華上<sup>一</sup>坐<sup>ト</sup>アリ法事贊<sup>ニ</sup>ハ行者見<sup>己</sup>心歡喜終時從<sup>仏</sup>

坐<sup>ニ</sup>金蓮<sup>ト</sup>アリ金蓮ニナスモノ此等ノ文ニ合セリ青蓮ハ大論<sup>九</sup>七<sup>左</sup>云水

中生<sup>ニ</sup>華<sup>ハ</sup>青蓮華<sup>為</sup>第二<sup>ト</sup>アリ白蓮ハ芬陀利ナリ法華悲華兩經ニ譬

ヲ取ルヤ觀經ニ念仏者ノ嘉称トスルヤ並ニ上々華ノ徳ヨリ起レバコレ

マタ仏座ノ蓮タルベシ

蓮台ノ下ニ獅子ヲ安ズルハ師子座ヲ表スルノ儀ナルベシ但シ仏座ヲ繪

ジテ師子座ト名クルハ必シモ師子ヲ安ズル故ニハ非ズ大日疏冠註一之五十七

引ニ大論七十三曰仏於九十六種外道中一切降伏無畏故名二人中師子

其所坐処若床若地皆名師子座抄出冠註云師子座者八葉蓮葉々下各

有ニ師子一八師子共載一蓮花是其相也而此師子仏因位菩提心勇

勤表示故但即事而真故此師子即勇健菩提心德也此心本来有ル

四智四行徳一為レ八也云云ソノ制ハ密部ヨリ出タルナラン

仏寺ハ梵土ノ儀ニ准ゼバ東向ナルベシ如次上引且浄土門ニ於テハ無量

壽儀軌初行事鈔下四三觀念法門六等ニ所レ明念仏道場式無常院式等ニ仏

像ヲ西壁安置ストアリ又ニ河譬西岸招喚ノ意ニ依ルニ東向最モ宜カル

ベシ本山東向ソノ由アルニヤ又中夏ノ風西方ヲ尊ブ事ハ鶴林玉露十三

八云四方以レ西為レ尊者之廟太祖坐レ西所謂正ニ太祖東向之位一是也今

朝廷之上群臣皆自ニ東階ニ而昇不ニ敢昇レ自ニ西階一亦以レ西為レ尊也凡賓

主之席主ハ而賓ハ西亦所ニ以尊レ賓也梵土ノ風ト所以ハ相反スレド具如ニ

彼叙一

北向ニセザルハ北面ハ臣位也仏ハ至尊ナレバ不レ可ニ北面北ニ門ヲ

設ザルモ亦爾統日本紀十七「十五」孝謙帝天平勝宝元年四月朔帝幸東大寺對盧舍

天子南面至尊尚那仏像前殿北面對像自稱三寶「乃」奴「止」仕奉「流」天皇云云

テ例ヲ大江匡房二問フ匡房答ルニ那爛陀寺西明寺六波羅密寺三国ノ例

ヲ以テセリ徒然草百八十一道眼ノ言ヲ引テ云那爛陀寺大門北向ハ西域伝

法顯伝等ニモ見エズ唐土西明寺ハ北向勿論也今案慈恩伝西域記高僧

伝等ニモ那爛陀北門ノ説ナシ行事鈔下三十五云中国伽藍門皆東向「止」

神州尚レ南為ニ正陽一不ニ必依ニ中土法一也探玄記如ニ上引一唐僧僧云周僧実

ノ伝ニ梁某寺講堂ニ北門南門アル事見エタリ日本ニテハ護国寺東竹田

安樂寿院空也寺等ミナ北門ナリ六波羅ニ限ルニ非ズ

七堂伽藍ノ名ハ三門仏殿法堂方丈庫裡浴室西浄コレナリ百丈清規ニ出

タリト未レ詳ニ本拠伝写祇園精舎三百堂要処為ニ七堂涅槃經也如ニ上引一

本山ニ祖師堂ヲ大ニシ阿弥陀堂ヲ次ニスル事ハ本山ハ祖師ノ本廟ナル

ヲ以テ鉅構ニセリ叢林集ニモ末寺ニハ不レ許ニ別建ニ祖堂ニ簡別可レ見遺徳

記云蓮師言当寺是忝クモ龜山院伏見院兩御代ヨリ勅願所ノ宣ヲ蒙テ私

ナラザル寺ナレバ本堂ナクシテハ所詮ナシトテ弥陀堂ヲモ再興シ給ヘ

リ云云然レバ弥陀堂ハ祖師本地堂ニシテ且天長地久ヲ祈ルノ道場ノ為

ニ营造アルモノユヘニ其制ヤ減ゼリト雖モ課誦等必ズ本堂ヲ先トシ

莊嚴布置モマタ備密ナリ東門渋谷高田其外木部大火後越州光明寺知恩

院知恩寺新黒谷光明寺等ミナ祖殿ヲ大ニセリ誓願寺永観堂等ハモト古

仏殿ニシテ後ニ改宗シテ祖殿ヲ加造セル故ニ同例ニ非ズ

本山ニ香部屋アリ亦名ニ香房一役僧集会ノ所ナリ毘那耶雜事二十六

「十」香殿注云不レ可ニ親触ニ尊顔一故但喚一其所住之殿一然名為ニ仏堂仏

殿一者斯乃不レ順ニ西方之意由レ是仏堂仏殿等ト称スベキヲ仏字ヲ避テ

香殿等ト称スルナレバ香刹香閣等皆同レ之香部屋モ其意ナルベシ  
祖堂ノ前面両隅ニ平常閉テ不レ開戸口アリ閉軸ト名ク宗主葬送ノ時コ  
レヨリ出入ス閉ハ常レ閉ユヘニ名ケ軸ハ殿隅ノ終ナレバ卷軸ノ義ニテ  
名クナルベシ

祖殿正面ノ門内ニ立ル牆ニ多名アリ一云門レ隱鷺森坊旧凶ニモ御門

隱ト銘ゼリ一云築立堀一云重門工匠書武家向屏重門有平屏重門無屋屋無無製

度アリ共ニ広間ノ門也今ノ牆トハ別ナリ説文闔城内ノ重門也ト注ス

論語八邦君樹シテ塞レ門註屏謂ニ之樹ニ塞猶レ蔽也設二屏一於門一以蔽ニ内外一

也此等ノ説アリト雖モ異域ノ制必シモ則ルベキニモ非ンカ案糺宮ノ社

及熱田ノ社等ニ相類スル牆アリ高野山ノ諸院ニ多設レ之興福寺勸進堂

ノ前東へ出ル門内ニモアリ土人云西方有葬所故蓋隔ニ尊儀一而使三門前來往二

者ヲ免ニ褻瀆一之罪一之設乎ヲ

本山築地ノ東北隅ヲ闕モノハ鬼門ヲ忌避ルニ似タリ東門興然ラバ宗意

ニ害アルニ非ズヤ此有二説一一云雍州府志一「七」云紫宸殿元雖レ向レ

南小横レ東凡設二城樓殿舎一時避二正当方一与レ避二鬼門方一本朝之流例而

是為二故実一一横町東縦町南北是亦准二紫宸殿之棟一而小横レ東武江城及諸国

城樓街衢云云由レ此国風ニ遵ズルニ妨ナカルベシ蓮宗主所謂他宗ニモ

公方ニモ対シテハ争トカ不レ忌レ物ト下同二稻荷祭ノ時神輿ニ供料ヲ

奉ルガ如キ類四月上卯日稻荷神輿五社過三大宮通本山正後一都是土俗通儀ニシテ

法門安心ニ関ルコトナシニ云近刻閑論上六云鬼門具云三鬼神門一鬼神ハ

陰陽不測其見于形者日輪也大陽之精出三東北隅一故略云二鬼門一帝九

五之位人中陽之至極則憚三陽々相對一而闕二鬼門一正月一日三月三日五

月五日七月七日九月九日日陽數重故避テ為二祝日一城郭殺伐氣為レ主

屬レ陰由レ是故對二鬼門一宮禁レ反レ之故憚レ之此說出二信交生諸說弁釈一

又雜修談元文元年撰津引三漢官儀一云宮二宮舍一皆闕三東北隅一其東北所二日

之初出一故闕二其充一而為二扶政之教一也天闕之名起二於此一則天闕皇宮

之号而取二義一於慎一而已本願寺之宮不レ減二屋製一乎皇宮何夫拘二鬼門

説一乎云云閑論ノ説承用スベシ後説モ類似スレドモ漢官儀ノ文可レ疑

天闕ノ闕ハ積名闕在二門兩旁一中央闕然ト為レ道也古今註人臣至レ此則

思二其所一闕正字トアレバ東北隅ヲ闕ノ義ニ非ルニ似タリ本山既ニ營構

ヲ紫宸殿ニ倣象ス故宮牆ニ准ジテ東北ヲ闕クノミ若必ス鬼門ヲ避テ然

ルトナラバ諸別院諸末寺モ本山ニ遵フベシ其外禳災禁忌ヲ本トスル公

武ノ第宅他宗ノ寺院ハ最モ此制アルベキニ自余不爾本山独如レ此禁

延ノ制ニ則ルコトソノ理明白ナリ疑問解東門菴云タ往來ノ便ニセシ

為二東北隅ヲ少シ欠トハ窮窘ノ遁辭評スルニ足ラズ凡鬼門ノ本説蒙昧

タリ蔡邕独断上三云海中有二度朔之山一上有二桃木一蟠屈三千里卑枝東

北有二鬼門一万鬼所二出入一也神荼与二鬱壘一二神居三其門一主閔レ諸鬼一

其惡害之鬼執以二葦索一食レ虎云云ソノ外法苑珠林十六引二神異經一

谷響集一引二海水經一曆鑑輯要九引二日用宝鑑及山海經一叢林集四下

十一引二諸文一又有記作二五行配一方維良方相尅木尅土尅土尅水之説上何レニヨルト



モ東北隅ノ遠処ニ惡鬼邪神アリテ營寺造塔ニ良隅ヲ犯シテ墻角ヲ出セ  
バ災害ヲ作スト云ノ説ナシ畢竟小説家ノ怪談ニシテ内典ハ勿論外家ノ  
正經ニモ所レ不レ載愚俗ハ甚懼ルト雖モ端人正士ノ拘ルベキニ非ズ況  
ヤ仏弟子ヲヤ又況ヤ專修念仏ノ行者ヲヤ和讃曰天地ニ滿ル惡鬼神皆悉  
ク怖ルナリ昔シ永明智覺禪師營ニ團厠一犯ニ金神七殺方一神不<sub>レ</sub>敢加<sub>レ</sub>害  
出ニ永明道蹟一祖誥信ズベクンバ豈俗説ニ惑ハシヤ 小説ニ叡山ハ王  
城ノ鬼門ヲ守ルト云ヘルハ流俗ノ浮言不<sub>レ</sub>足ニ信用一モシ伝教慈覺等ノ  
所<sub>レ</sub>云ナラバ蓋シ適時ノ巧言ナランノミ

天明戊申京師大火吾門東門築地共  
罹<sub>ニ</sub>焚毀<sub>ニ</sub>己酉夏不肖潛謀<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>同志<sub>ニ</sub>  
欲<sub>ニ</sub>令<sub>ニ</sub>西門共改<sub>ニ</sub>造<sub>ニ</sub>  
之<sub>ニ</sub>以解<sub>ニ</sub>世惑<sub>ニ</sub>未<sub>レ</sub>果

因<sub>ニ</sub>記<sub>ニ</sub>三年塞ノ事曆鑑輯要<sub>紙</sub>初云大歲神者曆例曰歲星之精降<sub>ニ</sub>天地之間<sub>一</sub>  
觀<sub>ニ</sub>察<sub>ニ</sub>万物<sub>一</sub>福<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>罰<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>故向<sub>ニ</sub>此方<sub>一</sub>犯<sub>ニ</sub>凶事<sub>一</sub>者必得<sub>ニ</sub>惡病<sub>一</sub>子歲  
在<sub>ニ</sub>子方<sub>一</sub>丑歲在<sub>ニ</sub>丑方<sub>一</sub>余皆如<sub>レ</sub>是大將軍者新撰陰陽書曰太白星之精方  
伯之神也三歲一移<sub>レ</sub>居亥子丑在<sub>ニ</sub>西方<sub>一</sub>寅卯辰在<sub>ニ</sub>子方<sub>一</sub>巳午未<sub>ニ</sub>卯  
方<sub>一</sub>申酉戌在<sub>ニ</sub>午方<sub>一</sub>故俗云<sub>ニ</sub>三年塞<sub>一</sub>此方百事不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>犯但遊行五日  
用<sub>レ</sub>之無<sub>レ</sub>咎金<sub>ニ</sub>神者<sub>一</sub>且王之精遊<sub>ニ</sub>行南浮<sub>一</sub>殺<sub>ニ</sub>戮<sub>ニ</sub>不善<sub>一</sub>故此方可<sub>レ</sub>厭甲  
巳在<sub>ニ</sub>午未申西方<sub>一</sub>丙辛在<sub>ニ</sub>子丑寅卯方<sub>一</sub>戊癸在<sub>ニ</sub>子丑申酉方<sub>一</sub>庚乙在<sub>ニ</sub>  
辰巳戌亥方<sub>一</sub>壬丁在<sub>ニ</sub>寅卯戌亥方<sub>一</sub>但遊行五日用<sub>レ</sub>事無<sub>レ</sub>咎歲德神者五行  
書曰凡陰陽用<sub>レ</sub>事為<sub>レ</sub>善遇<sub>レ</sub>德故歲德之方一年中万事有德之方也是皆十  
干之德也甲巳在<sub>ニ</sub>寅卯<sub>一</sub>間甲方<sub>一</sub>丙戌辛癸在<sub>ニ</sub>巳午間丙方<sub>一</sub>庚乙在<sub>ニ</sub>申酉  
間庚方<sub>一</sub>壬丁在<sub>ニ</sub>亥子<sub>一</sub>間壬方<sub>一</sub>詳在<sub>ニ</sub>曆林問答<sub>一</sub>云云コレマタ鬼門ト同

玄智『考信録』の基礎的研究(その2)

ク雜伝ノ所説ニシテ蒙俗ノ懼レ避ルル処ナリ化土卷末一引<sub>ニ</sub>本願業師經<sub>一</sub>  
言又信<sub>ニ</sub>世間邪魔外道妖嬖之師妄説<sub>ニ</sub>禍福<sub>一</sub>便生<sub>ニ</sub>恐動<sub>一</sub>心不<sub>ニ</sub>自正<sub>一</sub>云  
云正当<sub>レ</sub>之 三河記三十四云慶長五年九月十五日美濃青野ヶ原合戰諸將告<sub>ニ</sub>元師家<sub>一</sub>  
康云十五日西塞也可<sub>レ</sub>延<sub>ニ</sub>公云西塞<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>忌敵在<sub>ニ</sub>西故塞<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>是我向<sub>ニ</sub>  
關<sub>レ</sub>之也凡天地之理有<sub>レ</sub>始者有<sub>レ</sub>終閉者開是常理也迷時為<sub>レ</sub>城惶時空<sub>ニ</sub>本來無<sub>ニ</sub>東西<sub>一</sub>何忌  
之有是為<sub>ニ</sub>味方<sub>一</sub>吉日<sub>一</sub>也遂合戰<sub>ニ</sub>大勝<sub>一</sub>又四十二出<sub>レ</sub>之大同小異此与<sub>ニ</sub>宋帝言<sub>ニ</sub>西家之東是東  
家之西也<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>忌避<sub>一</sub>一般卓  
見也學仏之徒豈可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>省悟<sub>一</sub>乎

寺トイヒ道場トイフ名ノ縁由ハ且ク論ゼズ仏殿ノ通称トスルハ差別ナ  
シ隋終南山龍池寺ヲ龍池道場トモ名ガ如シ<sub>統僧伝</sub> 仏祖統紀三十九「十」  
曰隋大業九年詔改<sub>ニ</sub>天下寺<sub>一</sub>曰<sub>ニ</sub>道場<sub>一</sub>「文」但シ道場トハタゞ法座ノコ  
トヲモ称ス所謂慈悲道場熾盛光道場水陸道場ノ類コレナリ然レバ俗家  
民屋ニテモ本尊ヲ安ジ念仏修行ノ場トスレバ即チ道場ナリ空也上人ノ  
市中即是道場ト云モコノ意ナルカ吾門ノ古昔ノ道場トセルハ多クハ民  
家同様ノコト、伝フコレヲヨリ道場ハ寺ヨリ少シ品ヲトレルヤウニ俗  
間ニ思ヘルニヤ改邪鈔<sub>九</sub>曰サレバ祖師聖人御在世ノムカシネンゴロニ  
一流ヲ面授口決シ奉ル御門弟達堂舎ヲ當作スル人ナカリキタゞ道場ヲ  
ハ少シ人屋ニ差別アラセテ小棟ヲアケテ造ルベキヨシマデ御諷諭アリ  
ケリ中古ヨリ以<sub>レ</sub>來御遺訓ニ遠カル人々ノ世トナリテ造寺土木ノ企ニ  
及ブ条仰<sub>ニ</sub>違スル<sub>一</sub>至リ大キニ歎キ思フトコロナリ「文」又云然レドモ  
廢立ノ初門ニカヘリテ幾度モ為<sub>レ</sub>凡ヲサキトシテ道場ト名ケテコレヲカ  
マハ本尊ヲ安置シ奉ルニテコレソアレコレハ行者集會ノタメナリ一道場  
ニ來集センタグヒ遠近異ナレバ來臨ノ便宜不同ナラントキ一所ヲ占テ

モ事ノ煩ヒアリヌベカランニハ数<sup>ア</sup>多<sup>ブ</sup>処ニモ道場ヲ構フベシ爾ラザラ  
 ンニ於テハ町ノ内サカイノ間ニ面々各々ニコレヲ構テ何ノ要カアラ  
 ン誤テ事繁クナリナバソノ失アリヌベキモノ歟反故裏書三  
十六紙同之吾門道場ノ  
 本測知スベシ必シモ伽藍梵刹ノ謂ニハ非ズ婦女ヲ貯ヘ魚肉ヲ煮ルスベ  
 テ俗家ノ風儀タルコト勿論ナリ然ルニ此等ノ説ニヨレバ当今本山ヲ始  
 メ諸寺院共ニ殿堂ヲ宏麗ニスルコト諸宗ニ甲タルモノ疑フベキニ似タ  
 レドモ古今時異ナリ当時ハ宗風繁昌シ天下帰仰ス輪輿美ヲ尽サズンバ  
 法門ヲ光顯スルニ足ラズ何ゾ一隅ヲ守ルベケンヤ本山已爾末寺モ准ズ  
 ベシ但シ強テ錢財ヲ聚斂シテ過分ノ當興ヲナスハ慮リア  
ルベキコトナリ上ノ祖訓ヲ熟味スベシ具如別論  
 寺号院号山号ノ三ヲ並ベ称スルコト本邦ノ諸大刹ニ多アレドモ支竺ニ  
 ハコレナシト見ユ山寺ナドハ別ニ山ニ就テ山号ヲ称スルモ妨ナシ王城  
 聚落ノ寺ニ何ゾ山号アルベキヤ本山祖山開山等ハ沿襲ノ称ニシテ一例  
 ニ非ズ名実不相応ト云ツベシ邦俗ノ錯リナリ然レドモ山号尚可レ恕寺  
 号院号並べ唱ルコト甚ダ謂ナシ吾門諸巨刹興正寺常樂寺本  
德寺顯証寺等ニハ此弊ナシ  
 案ニ寺ト院トハ宮ト殿トノ如ク総別ノ異ナリ中夏五台山ノ華嚴寺ニ善  
 住閣院潤東院華嚴院等アリ宋僧伝  
廿一又叡山延曆寺ニ止観院宝幢院楞嚴院  
 アリ其外禪宗五山ノ例等可レ知一寺ニ兩名アルニハ非ズ知恩院ト大谷寺ト  
ハ仏殿ト祖堂トノ  
 称ナリ又淨華院ニ寺号山号ナク誓願寺ニ院号山号ナシ十八壇林ニハ多ク寺号院号ヲ並べ  
 称ス可レ謂レ陋矣摸象記中「十八左」云聖道諸教為化出家乃至故在「山林空閑處」說他宗寺  
 院皆称「山号」依此式云云

コロナリ考フルニ籠ノ字ヲ開テ二字トセルナラン小補韵会云説文籠  
 大長谷也從「谷龍声」或作「筵」文広韵云籠盧紅切大谷「文」大谷ヲ籠  
 ト云ユヘニ龍谷ト分ツマデナリ東門亦用龍谷山之称出近來著述或以山ノ下  
有龍谷而附會者妄說之言不不足共弁耳  
 竊謂龍谷之称非レ不<sub>レ</sub>佳也仍<sub>レ</sub>旧貫<sub>レ</sub>則如之何 大谷ハ知恩院ノ地ニシ  
 テ即チ塔頭崇泰院ノ後庭ニ祖墳ノ旧趾イマニ存ゼリ古ヘハ祖山祖墳共  
 ニコ、ニアリシ故ニ大谷本願寺ト称スソノ後祖山ハ処々ニ基ヲ移スト  
 雖モ靈墳ハコ、ニアリシガ慶長八年癸卯十月今ノ鳥部山ニ移サレシヨ  
 リ大谷ノ称ツイニコノ山ニ帰セリ家康將軍以來歴世ノ御朱印ニモミナ  
 大谷道場トアリマタ吾門ノ盛化ヲミルニタレルモノカ因記大明一統志三  
十四云真定府  
有本願寺  
 本山ノ經藏ハ延宝五年三月ヨリ經始シ六年二月廿五日慶贊東叡山板ノ  
 經六百六十五箇摺本六千三百廿三卷ヲ安ズ額ハ寂宗主筆傳翁両童八  
梵王帝釈持國增長  
天 廣目多聞阿金剛 像ハ仏師康雲造 運慶十  
七世孫 石座ハ鞍馬山自然奇木也慶贊ノ  
 時ハ傳翁像ヲ脇ヘ移シ画仏ヲ安ジテ音楽伽陀登壇誦經小行道十四行偈  
 等ノ法事具如<sub>レ</sub>輪藏慶贊記<sub>一</sub>  
 輪藏ノ前ニ傳翁父子像ヲ安ズルコトハ仏祖統記三十四右云梁傳大士  
 啓<sub>テ</sub>二世人多<sub>レ</sub>故不<sub>レ</sub>暇<sub>レ</sub>誦<sub>レ</sub>經及不<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>字乃於<sub>レ</sub>雙林道場<sub>一</sub>創<sub>レ</sub>轉輪  
 藏<sub>一</sub>以奉<sub>レ</sub>經卷<sub>一</sub>其誓有<sub>レ</sub>曰有<sub>三</sub>登<sub>三</sub>吾藏門<sub>一</sub>者生々不<sub>レ</sub>失<sub>三</sub>人身<sub>一</sub>有<sub>三</sub>  
 能信心推<sub>レ</sub>之一<sub>一</sub>則与<sub>三</sub>誦經<sub>一</sub>其功正<sub>レ</sub>等有<sub>三</sub>能施転<sub>レ</sub>計<sub>レ</sub>数者所<sub>レ</sub>獲  
 功能。即与<sub>レ</sub>誦<sub>三</sub>誦一大藏經<sub>一</sub>正等無<sub>レ</sub>異藏前相承列<sub>三</sub>大士像<sub>一</sub>備<sub>三</sub>

儒道冠服之相、一者以三、大士常作、此狀、也列二、八大神將、一者八部天神也、  
保境將軍者在日鳥傷、宰發、レ誓、護、藏、者也、〔文〕傳翕伝ハ統記廿三、右  
二出タリ按ズルニ大士ハ齊建武四年ニ生ジテ陳大建元年ニ寂ス然レバ  
輪藏所統ノ經卷ノ數ハ上ニ所、レ引隨錄ニ出セル五千余卷ナルベシ輪  
藏ノ製今時ノ製ヨリハ小サカン藏前ニ大士ノ像ヲ安ズルモ中華以來ノ  
式タリ左右ノ童子俗ニ笑仏ト称ス漢典ノ抛ヲ見及ハズ伝ニ年十六娶ニ  
劉氏、生ニ子、一普建普成トアレバ左ハ普建右ハ普成ナルベシ二子ノ伝  
未レ詳大士ノ冠ハ道ナリ履ハ儒ナリ袈裟ハ釈ナリ三家ヲ兼備スル貌ヲ  
示セリ趙宋仏印為ニ王荆公、作、傳翕、像、贊、曰道冠儒履釈袈裟和會三  
家、作、一、家、忘、却兜陀天上路、双林癡坐、待、龍華、釈門正統及釈  
氏稽古略云云  
伝大士別伝一卷アリ

護法錄四十鳥傷毘盧宝藏閣碑文云天魔鬼神衆手持三刀劍具、護、法、禦、  
不詳、一、苟、撼、動、之、循環、不、復、停、又五六右日本端竜山輪藏  
記云崇至上、覆、機輪下、承、鉅木中、貫、方格層列、經、甌、櫛、比、繪像精嚴神  
奥州南部忠禪寺經藏  
ノ像設為ニ希奇、印  
布セリ  
君鬼伯翼、衛、後先、〔文〕何レモ今ノ制ニ類ト見エタリ

諸經論ノ次序ハ貞元釈教錄二十二、云般若經建初者謂諸仏之母、ナレバ也也旧  
録之中編、レ此、無、次、今此録中大小乘經皆以二部類、一、編、為、二、次第、一、小  
乘、諸律、拋、本末、向、為、倫、次、大乘諸論以二釈、經、者、為、先、集、解、義、者、  
列、之、於、後、一、小乘諸論、拋、二、部、次第、發智、為、レ、初、六、足、居、次、毘婆娑、等、支

玄智『考信録』の基礎的研究(その2)

派編、レ末、聖賢集伝内外両分大夏神州東西有、異、欲、使、科、条、各、別、覽、者  
易、知、〔文〕般若經ノ第一タルコト知ヌベシ閱藏知津ニハ五時ノ次第ニ  
從テ華嚴ヲ第一トス然レドモ小乘ヲ方等般若ノ先ニ置ベカラスト云ヲ  
以テ阿含ハ涅槃ノ後ニ列ネタリ今ノ輪藏ノ次第ハ貞元録ノ旧例  
ニ順ズレドモ必ズシモ悉ク同ズルニハ非ズ又今ノ輪藏ノ經函ノ表ニ記  
セル千文ノ符印ト經本經目ノ符印トハ別異ニシテ經函ノ符印ハ益ナキ  
ニ似タリ建藏ノ時ソノ考ヲナシ檢搜ニ便ナルヤウニスベシ

越前福井御坊ノ藏經ハ帙ノ裏ニ第一ヨリ二百七十五ニ至マデ數ヲ各々  
隨ニ次第ニ記レ之帙中ノ數卷ノ每卷ノ表紙ニマタソノ數ヲ紀ス故ニ虫干  
等ノ節雜僧トイヘドモ所紀ノ數目ヲ以テ合文トシテ取扱シムルニ混濫  
錯雜ノ失ナク最モ便宜ヲ得タリ

京七条道場金光寺經藏安、仏像、近來福井經藏亦安、仏  
像、恐非、本式、不肖、在、番、時、欲、改、移、之、別、処、而、弗、果

後漢以來伝訳セル聖典ノ卷數ヲ考フルニ或ハ五千余卷ト云ヒ或ハ七千  
余卷ト云ヒ或ハ八千卷ト云フ古今互ニ經本ノ増減アリト雖モ大途ハ古  
ハ五千余卷今ハ七千余卷ナリ隨衆經目録法經  
等撰、七、廿ニハ八經ヨリ支那著  
述ニ至ルマデ分テ九録トシ合ニ千二百五十七部五千三百一十一卷トア  
リ又翻經沙門及學士所撰ノ隨錄初ニハ都合ニ千一百九部五千五十八  
卷トアリ武周刊定衆經目錄右ニ云大小乘經律論及賢聖集伝合三千六百

一十六部八千六百四十一卷其見定入藏流行部卷不レ在、此數、又十三  
〔初〕列ニ見定入藏、云合八百五十九部三千九百一十卷三百九十一帙

〔文〕開元釈教録十九右初云合大小乘經律論及聖賢集傳見入藏者總一千七十六部合五千四十八卷四百八十帙〔文〕貞元釈教録十七右二云從後漢一速右至皇朝一合二十九代所出大小乘經律論并賢聖集傳總二千四百一十五部都合七千三百八十八卷於中一千二百六十一部都五千三百九十卷見行入藏レ其レ實數一但一千二百八十五部五千四百二十卷是見行、數レ其集傳中有七十七部四百五十レ八卷、並是此方撰非梵本翻出、レ一千二百五十五部二千三十卷是闕本數、レ兩件、見、闕、合、有、二千四百一十五部七千三百八卷、レ與前都數、欠、二十七、レ同者、選撰集、付、屬、曰、貞元入藏録始自大般若經終至法常任經顯密大集經總六百三十七部二千八百八十三卷也、レ錄二十九、レ宋僧伝六、レ唐僧徹伝曰、福壽寺尼繕寫大藏經、每、藏計五千四百六十一卷、

元大藏聖教法寶標目十一卷右曰自後漢永平十年戊辰至元大德十年丙午一千二百四十一季中間伝訳一百九十四人所出經律論三藏一千四百四十部該五千五百八十六卷至元勸同総録一右所、レ拳數目全同、レ之、レ案此拳三藏卷不入、レ宋濂護法録四五、レ毘盧閣、レ碑文云我聞法藏總為二千四百八十八卷、レ以別、レ計、レ之、レ凡六百億三萬一千八百八十八字、レ之多、レ也、レ又六、レ寶積三昧集序云以、レ卷、レ計者、レ梁、レ則五千四百、レ隋、レ則六千一百九十八、レ唐開元、レ則五千四十八、レ至、レ貞元、レ一、レ則又增、レ二百七十五、レ宋又增、レ七百七十五、レ元又增、レ二百八十六、レ今以、レ三千文、レ一、レ紀、レ之、レ自、レ天、レ至、レ遵、レ為、レ號、レ者、レ五百八十六通、レ為、レ二千二百二十九卷、レ取、レ宋藏目録云四千四百五十三部六千三百二十三卷六百六十五函。明藏目録一右、レ云六百七十七函六千七百七十一

卷〔文〕槃藏天字至塞字六百九十三字二百七十五帙般若ヲ首トシ明藏目録為レ終周録ノ説、未レ詳ソノ余皆為レ五千余卷、後來増続シテ六千余卷トス七千余卷ト云ハ加、レ闕本、レノ、レ數ナリ、レ大藏八千卷ト云ハ七千余卷ノ大數ニ約スルナルベシ、レ諸經録ノ中ニ武周ノ刊定目録ハ錯誤甚ダ多シ校定ノ人數ニ道綽懷感ノ名アリ貞元録十八三評、レ曰、レ當、レ刊、レ定、レ此録、レ法匠如、レ林、レ德、レ重、レ名、レ高、レ未、レ能、レ親、レ覽、レ但、レ指、レ揮、レ末、レ學、レ一、レ令、レ緝、レ撰、レ成、レ之、レ中間垂、レ失、レ幾、レ將、レ二、レ大、レ半、レ、レ此、レ乃、レ委、レ不、レ得、レ人、レ過、レ在、レ於、レ使、レ能、レ也、レ云云、レ優婆提舍ト云ヲ無量壽經論ノ作者トスルガ如キ又淨土三經異訳ノ説混淆スル如キ等可見近來明藏目録卷尾附、レ周録偽經目録、レ一、レ連環解四、レ二、レ會、レ積、レ十、レ往、レ生、レ經、レ真、レ偽、レ周、レ録、レ素、レ多、レ誤、レ何、レ必、レ勞、レ三、レ會、レ積、レ一、レ乎、レ藏、レ中、レ有、レ金、レ七、レ十、レ論、レ二、レ卷、レ勝、レ宗、レ十、レ句、レ義、レ論、レ一、レ卷、レ並、レ是、レ外、レ道、レノ、レ書、レナ、レリ、レ故、レ有、レ二、レ除、レ之、レ説、レ、レ出、レ貞元録十八、レ廿二、レ子、レ註、レ、

仏經モト汪洋□汗トシテ數量アルコトナシ當今東流ノ本ハ大海ノ一滂ト云ベシ商那和修滅後二七万七千本生諸經一、レ万、レ阿、レ毘、レ曇、レ藏、レ八、レ万、レ毘、レ尼、レミ、レナ、レ亡、レ失、レス、レト、レア、レリ、レ花、レ嚴、レノ、レ三、レ本、レノ、レ中、レイ、レマ、レ伝、レフ、レル、レハ、レ下、レ本、レ十、レ万、レ頌、レノ、レ經、レナ、レリ、レ大、レ論、レモ、レ梵、レ本、レノ、レ通、レリ、レニ、レ訳、レス、レレ、レバ、レ一、レ千、レ卷、レアル、レベ、レシ、レト、レ大、レ論、レノ、レ卷、レ尾、レニ、レ記、レセ、レリ、レ支、レ那、レ伝、レ來、レノ、レ藏、レニ、レ三、レ種、レアリ、レ宋、レ本、レ明、レ本、レ韓、レ本、レナ、レリ、レ宋、レ本、レハ、レ洛、レ西、レ並、レ岡、レ法、レ金、レ剛、レ院、レニ、レア、レリ、レ韓、レ本、レハ、レ洛、レ東、レ建、レ仁、レ寺、レニ、レア、レリ、レ又、レ芸、レ州、レ嚴、レ嶋、レノ、レ祠、レニ、レア、レリ、レト、レ云、レフ、レ明、レ本、レハ、レ現、レ行、レ可、レレ、レ知、レ並、レ岡、レノ、レ本、レ建、レ仁、レ寺、レノ、レ本、レハ、レ不、レ肖、レ親、レシ、レク、レ拜、レ闕、レセ、レリ、レ共、レ二、レ摺、レ、レ本、レナ、レリ、レ洛、レ東、レ獅子谷ノ藏ハ現本明、レ槃、レ未、レ詳、レ、レ二、レ建、レ仁、レ寺、レノ、レ本、レヲ、レ以、レテ、レ対、レ校、レシ、レテ、レソ、レノ、レ異、レヲ、レ書、レ入、レタル、レモ、レノ、レナ、レリ、レ凡、レソ、レ三、レ度、レヅ、レ校、レ合、レス、レト、レ記、レセ、レリ、レ案、レズ、レル、レニ、レ韓、レ本、レヲ、レ対、レ校、レセ、レント、レナ、レラ

パ建仁寺ノ本ヲ見ンヨリハ獅谷ノ本ヲ見ルニハ如シ現本ニ書入テ殊ニ三四校合セシ故ニ見分ルニ勞ナシ分明ニシテマタ精審タリ 宋韓明ノ三藏互ニ出入アリト雖モ大途ハ同ジコトナリ

慶安元年戊子江戸東叡山ノ天海始メテ和板ノ藏ヲ開ケリ然レドモ今ハ廢シテ行レズ本山經藏ノ本コレソノ板本ナリ嘗テ檢スルニ並岡ノ宋本ヲ摸刻セリト見ユ板ハ植字ナルニ似テ錯誤オホクシテ相似タル字ハ混濫セリ行レザルモ可ナランカ其後延宝六年戊午黄檗山ノ鉄眼マタ和板ヲ開ケリコレハ明本ヲスグニ板下トシテ刻シト見ユ全ク明本ト同ジコレヨリ藏經請ジヤスク且所用ノ紙ツヨクシテ披縮ニ便ナリ鍍鏤ノ功マコトニ大ナリ憾ラクハソノ撰タ、ニ支那ノ旧制ニ依準シテ修治ノ業ナキコトヲ何ントナレバ經論ノ中ニ其本見存シテ藏ニ漏タルモノナリ如ニ般舟經卷十二一礼等一支那撰述ニ至テハ最モ鹵莽ナリトス蓋シ貞元録廿三ニ支那ノ書若干ヲ加フソノ後當時流伝ノ藏ヲ編集スルコトハ唐季五代乱争以來經典散失ノ砌ニアリト見エテ僅ニ台家三大部ノ類ヲ甲トシテソノ余ハ枝本ノ諸雜書ヲ取テソノ数ニ充シム且支那モ禪徒ノ司ルニヤ禪家語録ノ類最モ多ク甚キハ詩文集マデヲ載タリ何等ノ無狀ゾヤ然レドモ書ナケレバ恕スベシ本邦ノ如キハ古來聖經賢伝ニ富メリ所謂大乘義章六遊意光宝ニ記律三大部大日義釈三論疏探玄搜玄唯識述記三家疏義林章大乘玄論十地論義記浄土章疏等ノ如キ枚挙ニ遑アラズ鉄眼何ゾカノ蕪穢ヲクダギリ去テ代ルニ此等ノ嘉穀ヲ以テセザルヤ禪者ノ教ニ

玄智『考信録』の基礎的研究(その2)

暗キコト嘆惜スベシ因テ謂ハ 旧目ニ依傍シテ新ニ別目ヲ製シ務メテ取捨出入シ千文ヲ記トスルコト如レ旧請藏ノ時新補ノ分ハ坊刻ノ本ヲ用ヒテ装裱帙函ミナ体ヲ同セバ費功少クシテ善藏備足セン近來學費書籍目錄成ル分部統撰マタ今所レ言ノ一助トスベシ

黄卷赤軸ノ事ハ有書引三教優劣伝ニ云国臣記云漢永平十五年明帝就二白馬寺前一築レ壇燒レ經道經皆成二灰燼一仏教儼然不レ動蓮花乱湧ス驗二視教字一不レ損二一毫一只見烟燼紙一黄木軸赤一色字一転二黄金一經卷皆作二黄卷赤軸一明帝大ニ悅採抄云梵本色經書写二貝多羅樹葉一々々黄一中之茎朱一学レ彼故黄卷朱軸也出淨土名目見聞此說未レ檢二本拠一輒ク信用シ難シ統紀三十六九叙二釈道角試事一云及レ焚二仏經一光明五色上徹二天表一烈火既一息經像儼然又卅四云燒レ經又案故事要言十一左六云書名二黄卷一有レ所レ自古人写レ書皆用二黄紙一用二黄藥一染レ之以辟レ蠹故曰二黄卷一有レ誤字一以二雌黄一滅レ之与レ紙相類故可二否文章一謂二雌黄一唐狄仁傑曰黄卷中方与二聖賢一对二何暇一偶二俗吏一語上耶又維摩略疏垂裕記智右九曰唐貞觀中始用二黄紙一写二勅制一焉至二高宗上元二年詔曰詔勅施行既為二永式一比用二白紙一多有二蠹蠹一今後尚書省頒二行天下一並宜用二黄紙一「文」コレニ依レバ黄紙ハ蠹蠹ヲ避ノ能アリテ用レ之故ニ黄卷ト称ス内典ニ限ルニ非ズ国臣記ノ說更ニ思扱スベシ今時經師屋所製黄紙ハ蠹蠹ノ能ハナシ

殿堂ノ屋瓦ノ兩端ニ魚形ノ瓦ヲ安ジ又内陣張付ニ荷花ヲ画クコトハ要

覽上<sup>廿</sup>云殿者即北方之制上安<sup>三</sup>鵝<sup>同</sup>魚尾<sup>一</sup>者是也尾今呼為<sup>三</sup>鵝吻<sup>一</sup>訛也炙  
穀子云漢栢梁殿災天火也越巫獻<sup>レ</sup>術取<sup>二</sup>鵝魚尾<sup>一</sup>置<sup>レ</sup>上以禳<sup>レ</sup>之今則象也  
若<sup>二</sup>古制<sup>一</sup>尾上更加<sup>レ</sup>鉄作<sup>二</sup>水草之形<sup>一</sup>俗呼為<sup>二</sup>攢鳥<sup>一</sup>者風俗通曰古設多  
刻<sup>二</sup>蓮荷菱葉之屬水草<sup>一</sup>所以厭<sup>レ</sup>火也コレニ依レルカ但日本ノ故実別  
ニ存ゼルニヤ蓮花ヲ画クハ華藏界蓮華莊嚴ヲ表スルノ儀モアランノミ  
本山祖厨ノ左脇ノ全張付ニハ  
並頭ノ蓮ヲ画ケリ知者稀ナリ  
本山大厨戸口ノ上<sup>ニ</sup>安<sup>ス</sup>大黒天ノ木像<sup>一</sup>者倣<sup>二</sup>梵土<sup>一</sup>式<sup>ニ</sup>乎南海寄帰伝<sup>一</sup>  
八載<sup>下</sup>西方諸大寺食厨柱側或大庫門前安<sup>二</sup>大黒神像<sup>一</sup>之縁<sup>上</sup>毎以<sup>レ</sup>油拭<sup>レ</sup>  
之色黒故号<sup>ス</sup>莫訶歌羅<sup>一</sup>梵言<sup>一</sup>大黒  
又築地ノ廻リ角<sup>ニ</sup>立<sup>ル</sup>梵字<sup>一</sup>石碑<sup>上</sup>コトハ一説<sup>□</sup>昔年市姫<sup>ノ</sup>道  
場及神祠アリシ時ノ碑ニシテ移住ノ節ノコレリト近来マデ下間屋敷  
台所門前西側<sup>今</sup>ノ内ニモ小祠<sup>アリ</sup>是モ昔年ノ遺ナリト云フ頼寛<sup>ノ</sup>御書ニ  
称<sup>二</sup>刑部卿屋敷<sup>一</sup>  
他処ニ移セリトゾ茶所ハ接待所ト称ス泉州ニ接待講<sup>アリ</sup>法宗<sup>主</sup>御書ニ  
モ接待講トアテラル仏祖統紀十八<sup>八</sup>宋宗曉<sup>伝</sup>云鑿<sup>二</sup>義井<sup>一</sup>於城南<sup>南</sup>樸社<sup>一</sup>  
曰<sup>二</sup>法華泉<sup>一</sup>以飲<sup>二</sup>行者<sup>一</sup>亭<sup>一</sup>其上<sup>ニ</sup>施以<sup>二</sup>湯茗<sup>一</sup>無<sup>レ</sup>間<sup>二</sup>道俗<sup>一</sup>結<sup>レ</sup>屋数楹創  
為<sup>二</sup>接待<sup>一</sup>文<sup>一</sup>コレ今ノ茶所ナリ接待ハ接ハヒキウケルノ義待ハアシ  
ラヒナリ